

# 社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓

## 第6回若者研究会

### 1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

### 2. 研究会基本情報

日時： 2022年2月24日（木） 14:00～17:15

場所： オンライン会議

テーマ： 「協力、共同性」について

報告者：

1) 貝ヶ石優（京都大学）

レビュー「協力行動、利他性、向社会性」

研究発表「淡路島ニホンザル集団における協力行動と寛容性」

2) 岩瀬裕子（東京都立大学）

レビュー「共同性、社会」

研究発表「コモンをつくること—スペイン・カタルーニャの「人間の塔」を事例に」

### 3. キーワードのレビューと概説

霊長類学キーワード・レビュー「協力行動、利他性、向社会性」

（貝ヶ石優）

ヒトをふくむ霊長類の社会において、協力行動は様々な文脈で広く見られる。霊長類学において、「協力行動」は、そこに関わる個体の受ける利益や払うコストとの関係から、大まかに相利的行動、向社会的行動、利他的行動の3つに分類される。まず、相利的行動とは、参加した個体全てに何らかの利益が得られるような行動である。例えば、一部の霊長類に見られる集団狩猟行動では、狩猟に参加した個体間で、獲物の肉の分配が行われる。この点において、集団狩猟は典型的な相利的行動であると言える。次に、向社会的行動とは、ある個体が別の個体に何らかの利益を与える行動である。この時、行為者が何らかのコストを払

っているかどうかは考慮しない。他個体から攻撃を受けた個体に親和的交渉を行う慰め行動や、困っている相手を助ける援助行動などは、向社会的行動の例として挙げられる。向社会的行動の中でも、特に行為者が何らかのコストを払って相手に利益を与える行動を利他的行動と呼ぶ。利他的行動の典型的な例として、社会的毛づくろい（以下毛づくろい）がある。毛づくろいは、相手の体に付着した寄生虫などを取り除き衛生環境を維持する機能を持つ。他個体に毛づくろいをすることは、採食や休息、生殖といったその他の行動に費やす時間を減らすことになる。つまり、時間的コストを払いながら、相手の衛生環境を維持するという利益を与えているという点で、毛づくろいは利他的行動と言える。

協力行動の進化を考えるうえで重要なのが、ただのり個体（フリーライダー）の存在である。協力行動は他個体に利益を与える行動であるため、自らは協力せずに利益だけを受け続ける個体が出現した場合には、社会の中で協力行動が安定的に進化することは難しくなる。このことから、協力行動が進化するためには、ただ乗り個体を防ぐための何らかの戦略が必要であると考えられる。実際、チンパンジーの集団狩猟では、狩猟に参加した個体は、参加しなかった個体に比べ、優先的に肉の分配を受けられる。またベルベットモンキーのメスは、集団間闘争場面において、積極的に闘争に参加したオスに毛づくろいを、消極的なオスに攻撃を行い、闘争への参加頻度を高める。このように一部の種では、協力行動に際して他個体に報酬や罰を与えることが確認されている。

利他的行動では、他個体に協力した個体が、のちに別の個体から何らかの形で協力を受ける（互惠性）ことにより協力行動が維持される。ヒト以外の動物において最も広く確認されているのは直接互惠であり、ここでは2個体間で直接的に利他的行動が交換される。それに対しヒトでは、直接互惠に加え、他個体に協力した個体が、それとは別の個体から利他的行動を受ける間接互惠をはじめとする様々な形での互惠性が存在する。これは、ヒトが他者からの評判に強い感受性を示すためである。ヒトは、他者の目がある場面では、より協力的に振舞うようになる。しかしこのような効果は、チンパンジーなどヒト以外の霊長類では確認されていない。社会的評判に対する強い感受性は、ヒトの高度で複雑な協力行動を支える基盤の1つと考えられる。

#### 質疑応答：

- フリーライダーを防ぐ戦略（strategy）が必要ということだったが、こうしたことにかんしてヒトの場合は、日本語では「社会的仕組み」というような語を使うことが多いように思う。この「戦略」とはどのような意味で使用しているのか。
  - 「生存戦略」のような進化的な意味合いで使用している。
- 「互惠主義」という語は「互酬性」と同じ意味で使っているのか。英語ではどのように表現するか。
  - 同様の意味で使用しており、英語では reciprocity である。霊長類学では「互惠性」

の方をよく使用する。

- 3種の協力行動（双利的行動、向社会的行動、利他的行動）について、時間的スパンをどのように捉えて区別するのか。
  - 誰が得をして誰が損をするか、その場その場で判断する。利他行動を受けた個体が別の場所へ行ってしまうと、その行為をした個体は損をすることになる。
- 利己的行動というとは、どのような行為をさすのか。
  - 例えば、毛づくろいをしあっている個体間にわりこみ、毛づくろいを受けるような行動が挙げられる。

## 人類学キーワード・レビュー「共同性、社会」

（岩瀬裕子）

### ■共同体から共同性、関係性（関わり合い：relatedness）へ

共同体に関する議論は、社会学におけるコミュニティ理論とも重なるが、人類学におけるコミュニティ概念は、作業仮設として設定された地理範疇として用いられ、対面的な結びつきのなかで共住する人びとの、最大の集団」と定義されたりする程度という指摘がある [川瀬 2019]。1980年代になると、ポストモダニズムがコミュニティ理論に影響を与え、従来の、近代（社会）／伝統（共同体）の二分法に基づく「近代化によって失われてゆく共同体」を否定し、再構築する動きが起こる [e.g.小田 2004；田辺 2005]。自らの日々の足場の喪失に呼応し、「日常」への注目が強まり、より「生活の場における実践の論理」に基づく「非同一的な共同体」 [小田 2004] や「変異する共同体」 [松田 2004] が着目されていった。他方、レイヴとウェンガーのように、ある実践共同体（実践コミュニティ）において、新参者が徐々に経験を積み重ねて古参になっていく過程を扱う議論 [Lave and Wenger 1991] なども人類学における共同体関連の議論に影響を与えている。社会文化人類学の一大中心テーマであった「親族集団」 [河合編著 2012：ii] といった対象に必ずしも縛られることなく、趣味や教育現場、職業集団などといった多様な対象を扱うようになっている。〈われわれ〉の編成の特徴や慣習、規範などを実践レベルで把握することに主眼が置かれ、共同性の存在に関する議論から、いかに「共同性を育むのか」 [左地 2017：26] という問いへと変化している。そして、より具体的な相互行為のありようを記述する流れへ移行している。

共同性に関する議論には、個と共同性の関係を分析する流れがあり、西欧近代的な個人主義にも、それと対置される集団主義にも、あてはまらない個と共同性の動態や絡み合いを照らし出す研究や個人やその身体から広がる複数的かつ多層的な個と共同性の様態に着目し、個と共同性の双方向的、相互交渉的な関係を明らかにする研究がある [左地 2017：28]。とりわけ、身体に関する議論では、共鳴や共振という議論が多い傾向にある [cf. 吉田優貴 2018]。こうして、いかなる関係性があるのか、あるいは、そのやりくりのダイナミクスへ

と研究関心が移行している中、アミットが論じる「離接 (disjuncture: 連結・結びつきが絶たれた状態)」やカンデアらによる「関係性の切断」や「ポスト関係論」と呼ばれる議論は、従来の議論ではネガティブな意味として捉えられがちだった「つながらない」、「つなげれない」あるいは「切断」といった、より日常や実践の過程に注目しながら、その都度、その場で立ち現れていく関係性の動態に着眼している。また、暗黙裡に境界を前提とする地域や組織、集団 (group) から「非境界的集合」へと議論が広がっており、特定の境界をもった集合範疇に縛られずに、より文脈や状況に応じた境界によって、差異があってもつながれる様相を描く研究もある。

## ■ 「社会」とは

「真正性の水準」は、フランスのレヴィ＝ストロースが提起したもので、「五千の人びとが作る社会は、五百の人びとの作る社会とは同じではない」[レヴィ＝ストロース 2007: 44]という単純な数字の上での規模の違いによる社会のつくりかたの差異を指摘するものである。五千の人びとが作る社会を「非真正な社会」、五百人の人びとが作る社会を「真正な社会」と呼び、人間把握の質の違いを指摘している。「真正性の水準」を展開した小田の議論によれば、その二つの社会の良しあしではなく、私たちがその二つの社会を同時に生きているといい、それを二重社会論として提出している。

今回の発表では、人類学から霊長類学への呼びかけとして、調査の際の境界がいかに設定されているのかを自覚的に問い直すことを意識した。霊長類学では対面による行為を調査するとされるが、例えば、対面関係にはないが、鳴き声やにおいなどによって「同種」と把握することはあるのか。もし、そうした理解があるとするなら、そうした「大きな社会」を維持するための、あるいは、「同種」の共存に寄与する、あるいは、しない、社会性についても考え得ることができるのだろうか。本発表と時を同じくするように始まったロシアとウクライナを巡る歴史的・地政学的衝突も、こうした問いと同じ地平で考えられるか、疑問が沸いた。

## 質疑応答：

● なぜ、「コミニタス *communitas*」に触れなかったのか。コミニタスは「共同体 *community*」と強く関連する語で、「社会」のように構造化されていない、人々が共通の経験を共有する状態を表すものとして近年見直しの動きが進んでいる人類学の基礎概念で発表とも関連するのでは。

→ ターナーのコミニタスは「反構造」とされるもので、日常の秩序からの一時的な逸脱状況を指す概念であるが、発表内では、人類学が乗り越えようとしてきた一つの流れ、例えば、「境界」の恣意的な設定への疑義や「共同体」を廃れた、古き、良きものとす

るロマン主義的な捉え方に対する批判を伝えようとしていたため、「コミュニタス」に触れるという考えが発表者にはなかった。以下は、当日、触れることができなかった部分であるが、発表者自身、修論の初校で「コミュニタス」を援用して、事例である「人間の塔」を分析した。しかし、それでは「コミュニタス」だと言えても、それ以上、うまく捉え切れない実践の様相があり、それ以降、発表者の事例を「コミュニタス」で再考することがなかった。今回、よいきっかけを頂いたので、再度、検討したい。

- 「分人」概念に関する用語で、「人」とあったところは「人格」とする方が望ましいのではないか。

→ 当日資料の文献表にあるように、該当箇所は[中空・田口 2016]からの引用である。詳細は、下記を参照頂きたい。

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjcanth/81/1/81\\_080/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjcanth/81/1/81_080/_pdf/-char/ja)

- 真正な社会と非真正の社会の違いで、評判の伝わり方に違いはあるか。非真正な社会はどのように評判を得るのか。

→ 真正な社会では、人と人が地続きの関係にあるとされるため、たとえ、ほかの人からの評判が悪くても、自分の中で「こういうことがあったからこうなのだろう」とその評判に留保をつけられたり、自分で確かめたりすることができる。また、直接、その人を知らなくても、友達の友達などに評判を尋ねることもできる。しかし、非真正な社会ではそうした人間把握の作業や物事の理解のための距離（関係性）が遠くなるため、どうしても訂正可能性が閉ざされてしまい、評判が一面的になったり、固定化しがちであったりすると考えられる。

## 総合討論：

### <境界について>

- 「非境界的集合」という語を聞いた際に、霊長類学を専門とする人はどのようなイメージを抱くか。その時々立ち現れる関係を研究するというのは理解できたが、霊長類学の場合はある程度集団を定めて研究するという前提を共有しているように思うが、どうだろうか。

→ 「群れ」を集団として捉えることができるが、群れの中にいる個体もあるし、外にいる個体もある。ある程度は境界を定めてアウトプットをしているが、場面ごとに状態が変化する。

→ グループ単位で考えてしまいがちだが、ボノボを観察していると、集団内で行うことは集団外の個体とも行っていたりするので、集団とは何かという定義は難しい。

→ 色々な社会交渉の積み重ねによって社会が形成されると思う。一つの集団の中でも様々な繋がりがあり、どのような交渉を行う/行わないかによって境界が明確になったりする。

- サルの話で、その場の 2 個体間のやりとりから利他/利己を判断するとのことだったが、集団という枠の中では捉えられないのか。
  - 紹介した研究では 2 個体間の交渉に焦点をあてている。
  - 1つの集団の中にも様々な境界がある(例.ママ友など)。ニホンザルの毛づくろいは、血縁個体間で生じることが多い。しかし、淡路島の個体群では、2 個体間の毛づくろいは非血縁個体間で生じやすく、一方で 3 個体以上の毛づくろいは血縁個体間で生じやすい。サルがどのような社会交渉をするかで血縁関係の境界が変わっていた。
- 人類学では境界を想定してしまったのはなぜか。
  - 植民地人類学の影響が大きいと思う。閉じた社会というものを想定した構造機能主義の影響などが考えられる。個々人のエージェンシーや人格を記述するためのモデルとして境界あるものとして社会を示してしまった。デュルケム的な観点で、より個に焦点を当て、分析的に構造をとらえた場合、まったく異なる現実があるのではないか。

#### 4. 研究発表

##### 「淡路島ニホンザル集団における協力行動と寛容性」

(貝ヶ石優)

ニホンザルは一般に、霊長類の中で最も寛容性が低く順位関係が厳しい、専制的な種として知られている。しかし近年、ニホンザルの寛容性には地域間変異が存在することが明らかになっている。中でも淡路島に生息する集団(淡路島集団: 兵庫県洲本市)は採食場面において特に高い寛容性を示す。動物における協力行動に関する実験研究から、採食場面における寛容性の高さは協力行動の起こりやすさに大きく影響することが明らかになっている。そこでニホンザルに見られる寛容性の地域間変異に着目し、同じニホンザルであっても、協力行動課題の成功率は集団全体の寛容性の高さによって異なるという予測を検証した。

対象集団は、一般的なニホンザルであり寛容性の低い勝山集団(岡山県真庭市)および寛容性の高い淡路島集団であった。実験課題として、ヒモ引き協力課題を用いた。この課題では、サルが一本のヒモの両端を引くことで、手の届かないところにあるエサを手に入れることができる。しかし片端だけを引いた場合、ヒモが装置から抜けるためエサは手に入らない。したがって課題の成功のためには、2頭のサルがヒモの両端を同時に引くことが必要であった。実験の成功率は、勝山集団で 1.0% (2/198 試行)、淡路島集団で (874/1488 試行) と、集団間で大きな差異が見られた。実際の実験場面を分析したところ、勝山集団では、高順位個体が装置を独占し、低順位個体が装置に近づくことができなかつた。すなわちこの集団では、2頭が同時に装置を利用することが出来ず、協力行動が起こりうる場面自体が生じなかつた。それに対し淡路島集団では、2頭が同時に装置を利用することができ、かつ報酬を巡る敵対的交渉もほとんど生じなかつた。またこの集団では、一緒にヒモを引く他個体が周囲

にいない時には、そのような個体が近づくまでヒモを引かずに待つ行動を獲得した個体も見られた。この行動の出現は、ニホンザルが他個体と行動を意図的に強調させる認知能力を持つことを示唆している。以上の結果から、ニホンザルは協力行動に必要な高い認知能力を持つが、しかしそのような能力が発揮されるためには、高い寛容性が必要条件となると考えられた。

ニホンザルはマカク属に属する霊長類であるが、マカク属の社会構造には、種間で大きな変異が存在する。例えばニホンザルやアカゲザルでは、個体間で外傷を伴うような激しい攻撃が起こりやすく、順位関係がとても厳格である。このような特徴を持つ種は、専制型マカクと呼ばれる。他方クロザルやトンケアンマカクと言った種では、個体の攻撃性が低く、順位関係が比較的緩やかになる。これらの種は、寛容型マカクと呼ばれる。淡路島集団の個体は、採食場面で高い寛容性を示すという点で、専制型よりも寛容型に近い特徴を持つと考えられる。そこで淡路島集団において、マカク属における寛容性を評価するための代表的な行動指標である、「攻撃性の高さ」、「社会的緊張の高さ」、「反撃の頻度」、「順位関係の厳格さ」について定量的分析を行った。その結果、前者2つの指標については寛容型、後者2つについては専制型によく当てはまる結果が得られた。このことは、淡路島集団には厳格な順位関係が存在するが、そのような順位関係は、採食場面のような特に緊張の高まりやすい場面でも顕在化しにくいことを示唆している。この集団では、個体同士が互いの存在を許容する程度が非常に高いと考えられる。

#### 【一言感想】

ヒトとヒト以外の霊長類における協力行動の違いの1つは、協力するという「意図」を個体間で共有するかどうかだと考えられている (Tomasello, 2009)。例えばヒト幼児では、誰かと協力した後は、その相手と報酬を共有しやすくなったり、好感を抱きやすくなったりといったことが起こる。しかしチンパンジーなどでは、このような現象はほとんど起こらない。そのため実験場面においてヒト以外の霊長類が見せる「協力行動」は、しばしば「社会的道具使用」、すなわち報酬を得るために他者を利用していると考えられている。カタルーニャ州における「人間の塔」においても、多くの人が個としては苦しみつつも、協力し合いながら1つの大きな「塔」が作られている。そこではやはり、Michael Tomasello が「we-mode」と呼ぶような、一体感を生じさせる認知的プロセスが生じているのだろう。「we-mode」に関する心理学的議論では、「個」を越えて「集団」あるいは「私たち」という1つの集合体としての意識が生じることがよく指摘される。しかし人間の塔についての議論では、むしろ「個」としての意識が強調されているように思われた。「個」としての意識が「私たち」に溶け合うのではなく、あくまで「個」が存在するからこそ一体感が生じるという議論は、これまでにない非常に興味深い視点に感じられた。

質疑応答：

- 淡路島のニホンザルは凝集性が高いということだが、これは一時的に多くの個体が高密度で集まることができるということか、それとも生息空間における個体密度が高いということか。
  - 今回の発表では、ある特定状況における密度の高さを示した。
- 淡路島では、末子優位の法則（妹の方が姉より優位）は成立しているのか。
  - 淡路島も末子優位はみられるが、逸脱も多くみられる。低順位家系だけでなく、わりといろいろな家系で逸脱がみられる。
- 寛容性が高いとはどういうことか
  - 相利的行動が多いということ。たとえば勝山集団は優位個体による独占が多いが、淡路島集団は協力行動が多く寛容性の高い集団といわれている。
  - マカクは種によって寛容性が異なるといわれ、社会構造も、順位構造が厳格な専制型から、そうでない寛容型というように異なる。
- 淡路島集団の寛容性が高いのはなぜか。
  - あまり理由をはっきりしていないが、遺伝子と関係あるという説がある。他地域のニホンザルは攻撃性が高くなる遺伝子をもつ個体が多いが、淡路島は寛容性を高める遺伝子をもつ個体が多い。島嶼なので、ボトルネック効果でこのような遺伝的傾向が強まったと考えられている。一方、食物の豊富さなど、生態学的な理由はあまり支持されていない。
- 寛容性の高いマカクは熱帯に集中しているのか。
  - スラウェシマカク（スラウェシ島に生息している7種の総称）はみな寛容的とされ、これは系統的に近縁だからと考えられている。
  - なぜ寛容性の高い遺伝子が選択されたか、というところは生態学的な要因もかかわっている可能性がある。ただし、果実食の種はある程度順位構造が厳密で、葉食の種は関係がゆるやかと言われていたが、マカクにはこれがあまりあてはまらない。
- 他の種との相利的行動にかんする研究などはあるか。
  - 異種のサルとの混群については知られているが、霊長類では他種とのそういった関わりはあまり報告がない。また、同種でも集団が異なれば、敵対的な関係なのが一般的である。

### 「コモンをつくること—スペイン・カタルーニャの「人間の塔」を事例に」

（岩瀬裕子）

本発表は、密着した身体接触を特徴とするスペイン・カタルーニャ州の「人間の塔（*castells*）」という民俗芸能のグループにおける民族誌的研究を通じて、「共有しえないもの」を持ちつつも直接的な関わりをもつ／もった人と人がどのようにその営みを継続させているのかを明らかにすることを目的にしている。本科研にひきつけるならば、「社会性」

なるものが継続するための基盤、もしくは、その基盤がいかに持続性を保っているのかと問いを変換させながら、「相互作用、ケア、共存」を重視するコモンをつくることとはどのような営みなのかを考えた。

「人間の塔」は、カタルーニャの祭りなどで見られるもので、230年の歴史を持つ。人びとが身体を密着させることで塔の土台をつくり、その土台の中心に人が人の肩の上に上り下りすることで塔をつくる。現在、塔造りが個々の収入とはなっていないが、その始まりにおいては、社会の最下層に位置していた人びとの副業としてあり、ともにからだを寄せ集めることで金銭を手にしてきた。

身体をともにして活動することは、共感や理解の始まりに思える。しかし、発表者が調査する最も伝統的だとされる「ベリャ」のあるメンバーは、身体接触が私たちの関係を助けるとは限らないと語り、どんなに同じ塔の中にも、「共有しえないもの」や受け入れられない存在があるという。「共有しえないもの」とは、身体にとどまらず、感情やこれまでの人生の経験なども含んでいる。1年に1度の祭りという日本のイメージとは異なり、週2回から3回の練習と年40回程度の祭りへの参加を、1年のうち10か月程度使って継続的に行っているメンバーたちは軋轢や摩擦に辟易し、常に文句をいっている。しかし、そうした「共有しえないもの」による〈つながり〉、あるいは、避けきれない肉体の声などから湧き上がってきってしまう各々の利己的な部分の表明をいかに継続的に維持していくかといった相互作用を通した日々のケアや共存にかかわるやりくりが、メンバーたちのコモンをつくる営みであり、長期的な「社会性」の醸成につながっているのではないかと考えた。

#### 【一言感想】

今回の研究会では、霊長類学における利他的な行動や寛容性とは、一見、相容れないような人間の利己性を基盤とした「社会性」を考えたが、霊長類学における観察をより長期的なスパンで見たり、利他的な行動を「してもらおう」側から同じ行為を見たりすることで、利他が利己に通ずる、もしくは利己が利他に通ずるといったような、相互行為、あるいは集団的な行為が持つ循環の様相を双方の研究領域で検討していくことができるのではないかと考えた。人類学において、これまで利己や利他、寛容性といった用語は積極的に用いられてはこなかったが、霊長類側からの呼びかけに応じて、また新たに考えるきっかけを頂いたように思う。

#### 質疑応答：

- Nさんについてだが、あれほど人が密集している状況で岩瀬さんとポジションを変えることができるのか。
  - 位置が固定されてしまったり、最下部の核のような場所だと難しいが、他のポジションは同じような体格の人同士なら自由に位置を交換することが可能である。

- Nさんと岩瀬さんの関係について、2人の適切な距離というのを、寛容などからめるとどのように語れるのか。なぜこの事例を挙げたか説明してほしい。
  - 共有しえない者でも、一緒に塔づくりをできるということを示したかった。
- 「パーツのように組みあがって……」という言葉が気になった。有機的な人と人の結びつきに焦点を当てようとしていたが、それを分からない人に説明する際には機械論的な説明になってしまうのはなぜか。
  - 物理的なモノとしての個人というパーツ的な側面と、「合わせようね」という気持ちの部分があわさりあい塔がつくられているためである。

## 総合討論：

### <「寛容」という言葉について>

- 霊長類学では、寛容/専制な社会という表現を用いていたが、人類学において、人間社会の特徴を寛容/専制といった言葉で表現することはあるか。
  - 人類学では、「法」の分野と関連するのではない。人間では集団を規制するコード（例. 法）が制定されており、ある案件における許容/非許容の程度を表す際に「寛容」という言葉が使われる印象がある。ブラジルでは社会自体が法を執行する十分なしくみをもっていないため、非常に寛容というイメージがある。
  - アメリカ人類学などでは、「専制 autocracy」は政治体制を表す際に使われたりするが、「寛容 tolerance」という語はあまり使わずに他のアプローチ法を用いる印象が強い。
  - ある集団において、異質な他者を受け入れるか、排除するかという場面で、受け入れる傾向にある際に「寛容である」という言葉遣いをするのではないか（例. 宗教）。
- スラウェシマカクは、寛容型マカクに分類されている。しかし、スラウェシマカクの示す低順位個体から高順位個体への反撃の多さを「寛容」という言葉で表現をすることには違和感がある。寛容ではないから低順位個体も高順位個体に反撃し、順位構造があいまいになっているのではないか。むしろ淡路島のように順位構造は明確だが、高順位個体が低順位個体を攻撃しないという特性のほうが「寛容」というイメージに近い。
- 「寛容型」マカクは、「平等的」と表現されることもある。寛容と平等というのは、人間社会では使い分けているか。
  - 人類学では、Ranked society と Egalitarian society というものがある。
  - 「寛容」という言葉にこだわりすぎると、人間とサルの橋渡しはむずかしいだろう。Egalitarian の訳語としての「寛容」であるとすると、専制/寛容の二項対立は、人間での首長制の階層化された社会とビッグマン社会（平等社会）に重ねて考えることができるのではないか。

(以上)